



大正9年の大洪水～酒井明 説話集27※～

この付近も、昔から度々天変地異にあっておりますが、その中のひとつ大正9年の大洪水。

「高知県の気象」という高知地方気象台発行のものを見ても大正9年という年は、やつぎ早に7月8月と台風がやって来て、おまけに8月は雨が多くなり荒れた年になり、この月の台風は土佐湾を西北にやってきて足摺に上陸したようです。

8月13日午後から降りだした雨は15日午後になって雷をともなう豪雨。本当にうつす様な雨で雨量1000ミリを越すものだったといわれます。

その日夜9時頃、今の宿毛大橋の土手が切れ、町内に一気に松田川の水が流れ込み、その泥水の跡が後々まで見られたお家もありました。

切れた土手の西面には、当時女衆が大勢いましたが、中にはその水のためずっと下まで流されて、水の引いたあとやっと見つかった人もあった程です。

普通なら目も耳もふさいでこわがる雷、いなびかり。それが流木にすがって流される人たちにとって、その時ばかりは早く光ってくれと待ち遠しいものでありました。

というのも、一体どこを流されているのか見当もつかない暗の中。いなびかりの照らし出す周辺の様子から、この分なら助かるかもしれない、と望みをつなぐ光になったのです。

小筑紫方面も大被害だった、という記録も残っていますが、水のためというより山くずれ、山潮、結局は雨が原因とはいえませんが、形がすこし違っていたようです。

高知県下で亡くなった人187人、そのうち92人までが宿毛近辺の人であったといえますから、荒れ様の程が推察されます。

篠川沿いでも小川のお宮など、その時流れ失し御神体も、行き先不明であったが、その後川原で見つかり有難いもんよ、と話してくれた人もおります。

自然の力のはかり知れない強さを念頭に置くことも大切ではないでしょうか。

※) 平成26年3月に逝去された宿毛市出身の酒井明さんは、長年教鞭をとる中で地域伝承や動植物の生態のフィールドワークを重ね、退職後も宿毛市文化財保護審議会(当時)長などを歴任、益々研究を深めながら観察日誌や説話、伝承技術などを膨大な手書き原稿にまとめられました。

ご遺族より宿毛歴史館に寄贈された原稿から、順次「酒井明説話集」として公開してまいります。